

小林千枝子 著

『戦後日本の地域と教育』

—京都府奥丹後における教育実践の社会史—

山田 恵吾 (埼玉大学)

本書は、戦後における京都府北部の奥丹後地域を対象に「地域と教育」の関わり、特に「学校教師が地域の人間形成に関与する場合に限定して、その可能性や課題を考察」するものである。着手から15年、入手資料「段ボール箱二〇数個分」にも及ぶ研究成果をまとめた労作である。

著者は問う。「子どもは家族あるいは家族に類する集団と、組織的な教育を施す学校およびその補助機関としての塾や各種スクール等があれば、十分に育つのだろうか」と。そこには、「教育家族」の要求とそれに適応する学校と塾が子どもの育成環境の中心として位置付くような、市場化する教育状況に対して、地域の持つ教育的意義を問い直そうとする問題意識がある。

著者のいう「地域」とは何か。それは、家族を取り巻く生活圏というだけでなく、一定の風景や動植物との関わり、人間関係も含む、子どもの具体的な行動を規定するものである。「人間形成力」としての地域への注目である。それゆえ本書は、子どもたちの「育ちの場」としての地域が大きく変貌し、そのことに学校が留意せざるを得なくなった戦後、とりわけ高度成長期を経た1970年代以降が叙述の中心となっている。

研究対象として奥丹後に注目した理由の一つに、1970年代後半から京都府下全域で展開された到達度評価について、奥丹後が地域ぐるみで積極的に実践したことを挙げている。到達度評価を「相対評価体制の子ども疎外あるいは教育疎外の状況を批判的にとらえて登場してきた」と捉え、「高度成長下の能力主義的教育政策の矛盾」が現れる奥丹後の地域社会に教師が学校教育をどう位置付けようとしたのかを見る窓口とする。人間形成力が低下する家族や地域がその機能を学校に求める。同時に企業社会が能力主義的な人材養成機能を学校に求める。学校は、その狭間で、危機にある子どもにどう関わるのか。「教育を受ける権利」保障の指標として、到達度評価に焦点を当てたところに本書の特徴がある。

本書の内容は3部構成で全22章(序章・終章含む)からなる。第I部「奥丹後の生きられた戦後史」では、戦後の奥丹後地域の実態に迫る。まず、農林業から丹後機業への産業構造の変化とそこでの人々の生活の変容に注目する。機業の発展によって「自然界との豊かな交流」が失われ、女性の働き方や子どもの生活習慣が変わる。さらに離村・廃村・過疎、学校統廃合など、高度経済成長をもたらした新たな教育課題に向き合う地域の姿が描かれる。そして教師は、「村に残る教育」か「都会に出る教育」かという葛藤の中から、「子ども自身が地域産業の歴史と実情を内在的に理解する」という「村を解放する学力」の形成こそが自らの役割であるとの認識に至る。「そこを生きた人々の目線」で描かれた点が特徴的である。

第II部「父母や教師たちの群像」では、保護者や地域住民、教師など奥丹後に生きた15人が登場する。通常、記録を残すことのない保護者や地域住民の日常と教育活動への思いを、聞き取り相手との信頼関係を土台にした丹念な調査や日記・著作などを通じて生き生きと描いている。当初、学校に批判的な住民が次第に教師への信頼を深めていく姿、町全体で地域の教育課題を共有していく姿、教師たちが地域を変革する運動の担い手となり、やがて地域の人々から信頼されていく姿など、人々の生活史を通じて地域と学校との関係が立体的に描かれている。「現地主義」を掲げる著者の真骨頂ともいべき部分である。

第III部「教育実践の諸相」は、「地域に根ざした教育」を展開した川上小学校と峰山中学校の取り組みを検証する。「地域に根ざした教育」とは、子どもの教育を地域住民が自らの課題として受け止め、適切な教育を計画・実施する「教育の住民自治」の一つのあり方である。教師は、地域社会の人間形成過程を学校の教育過程と連動させることを課題として引き受ける。川上小学校では高度成長に伴う地域の教育課題を、「労働教育」や「老人学級」といった旧共同体的な人間形成機能を引き出すことで克服しようとした。峰山中学校では、著者が「総合的な学習の時間」の先取りと評価する「目標学習」の実践を展開した。両校とも到達度評価に焦点づけて検討されている。

地域と学校の関わりを豊かに紡いだ、このモノグ

ラフから得られるものは多い。第一に戦後、地域社会と学校と家庭の三者の関係性の変容に注目しながら、教師たちが地域の人間形成力を活かそうとした実態を明らかにしたことである。1960年代から1980年代までを射程に入れた長期の定点観測の結果、地域の変容、家族の変容、子どもの変容など、学校を取り巻く大きな変化にもかかわらず、教師が自己変革を試みながら、眼前の子どもに誠実に向き合い、保護者や地域から信頼を得ていく過程を辿ることができる。市場化する教育状況の中で、教師のあり方を考える素材となり得る。

第二に、本書の特徴である「現場主義」、特に人物の生活史を重視した点である。教師としての教育活動の側面のみを切り取るのではなく、一人の人間としての生活の営み、人生の歩みの中で、教育という職務や地域での教育活動がどう位置付くのかという視点からの叙述が刺激的である。とりわけ教師の妻も地域に生きた一人の人間として描いており、家庭生活が職務に与える影響力の指摘には説得力があった。地域の教育といっても、そこに生きるひとり一人の人間の生き方に大きく規定されることにあらためて気付かされた。

最後に本書から刺激を受けた点について。到達度評価を地域と学校の関係性を見る物指しとして着目したのは卓見である。その上で、到達度評価実践そのものの評価をどう捉えたらよいか。奥丹後に育ち、「地域に根ざした教育」を享受し得た子どもたちがその後どのような人生を歩んでいったのか。子どもの生活史はどう描けるか。この点が本書を読んで最も関心をかき立てられたことである。「地域を解放する学力」「教育の住民自治」の成果は、すぐに目に見える形で現れるものばかりではない。長期波動として子どものその後の経験の中で活かされ、また再構成され、熟成されてその人の生き方、家庭生活、地域や職場の中で現れるものも多いはずである。無い物ねだりかもしれないが、子どもの生活史を通じて地域に生きた教師の実践が持ちえた意味や課題に迫ることができるし、それはまた「現場主義」を中心とする著者独自の手法でこそ検証可能である。続編の発表が楽しみである。

(学術出版会、2014年9月、428頁、5,600円)

高橋裕子 著

『明治期地域学校衛生史研究』

—中津川興風学校の学校衛生活動—

梶山 雅史 (岐阜女子大学)

本書は平成24年度に著者が兵庫県立大学大学院に提出した博士学位論文を、加筆修正したものである。最初に本書の構成を示しておこう。

序章 課題と方法

第一部 学校構想と初期の学校衛生活動—学校創設(明治六年)から明治一二年—

第一章 中津川興風学校の学校構想

第二章 明治初期における小学校の病気欠席の問題

第二部 地域と教師たちの学校衛生活動—明治一二年から明治二四年—

第一章 明治一二年のコレラ流行に対する中津川興風学校の「閉校」措置

第二章 中津川興風学校と岐阜県私立衛生会の接点—地方私立衛生会の活動と学校衛生—

第三部 明治政府の学校衛生政策と学校現場—明治二四年以降—

第一章 明治政府の学校医制度—三宅秀と三島通良の学校医論の比較—

第二章 中津川興風学校の学校医の活動とその意義

終章

付録 中津川興風学校の学校衛生活動年表—『中津川興風学校日誌』(明治七~三十七年度)を資料として—

序章で本書の目的が大略次のように語られている。従来の学校衛生史研究・学校保健史研究の多くは、国家制度変遷の研究であった。学校現場での保健・衛生活動の実態や考えがいかなるものであったかを取り上げ、資料に基づいて実証的に検討されることはほとんどなかった。本書では視点を転換し、岐阜県の中津川興風学校にスポットをあて、「興風学校日誌」を中心に明治期の学校衛生の活動実態を探る。と端的に宣言されている。